



あなたの平和の器にしてください
主よ わたしをあなたの 平和の器に
憎しみあるところに あなたの愛があるように
悲しみあるところに よろこびがあるように
あなたの平和の器にしてください
主よ わたしをあなたの 平和の器に
絶望あるところに 希望の道があるように
暗闇あるところに 光が満ちるように

<聖歌第417番より>

いつも大学礼拝で歌うこの聖歌第417番は、広く世界で「フランシスコの平和の祈り」として知られています。

1912年第1次世界大戦前夜、フランスのカトリック信徒団体「聖ミサ連盟」の月次報告書に「ミサにおける美しい祈り」として発表されたものが最初といわれています。

実際にはフランシスコの作ではないのですが、その後在俗フランシスコ会で愛唱され、聖フランシスコの絵の裏にこの祈祷文が印刷されたことから「フランシスコの平和の祈り」として広く信じられて愛唱されるようになりました。マザー・テレサやヨハネ・パウロ2世、マーガレット・サッチャーなど著名な宗教家や政治家が演説の中で引用し、キリスト教の教派を超えて祈られるようになりました。

2016年も間もなく終わろうとしています。今年も中東諸国をはじめ、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、そしてアジアの国々で、多くの悲惨なテロ事件が続発しています。イスラム国を名乗るテロ組織、またこれに同調するイスラム過激派集団が世界中に広がり大きな悩みの種になっています。こうしたテロ集団を撲滅するため、シリアやイラクなど中東諸国では空爆などによる掃討作戦が行われ市民も巻き込まれる悲惨な戦場となっています。紛争や貧困に苦しむ中東やアフリカからヨーロッパへの難民の流入が数十万人の規模に膨らんでいます。死者も数千人に達しEU(欧州連合)を中心に対策が練られています。しか

しこれまで難民の受け入れに積極的であったドイツやフランスなどヨーロッパ諸国の国内では難民受け入れに反対する強硬な動きが強まっています。またイギリスのEU離脱、アメリカ大統領選挙で他民族を排除する過激な発言を繰り返したトランプ氏が勝利するなど、民族対立がますます深まる方向に進んでいます。

日本では、昨年強行採決された安保関連法案が3月施行になり、集団的自衛権による武力行使が可能になりました。戦後70年、平和憲法のもとに世界の平和を作り出すために努力してきた日本の進路も危うい方向に進み始めました。

2016年のクリスマスを迎えるにあたって、私たち一人ひとりが世界の平和のために祈りそして行動しなければなりません。それもごく身近な第一歩から…。

ノートルダム清心女子大学の渡辺和子さんは、著書『面倒だから、しょう』の中で次のように書いておられます。

平和について議論することも大切です。国際間の紛争をやめさせることも大切です。しかし、私たち一人ひとりが日常生活の中でできることをおろそかにしてはいませんか。

家族の中に笑顔、いたわり合い、許し合いがあるでしょうか。他人に迷惑をかけないことはもちろん、進んで困っている人、さびしい人に手を差し伸べて、相手を喜ばす努力をしているでしょうか。

私たちはフランシスコの祈りのように「憎しみあるところに愛を、絶望あるところに希望の道を、神の愛を伝える平和の器」となりたいものです。

慰められるよりも 慰めることをとめよう
愛されることよりも 愛することもとめよう
赦すことにより わたしたちは赦され
神の愛を伝える 平和の器に

7月20日

「私の体験した東日本大震災」

千年に1度といわれる地震が東日本を襲った平成23年3月11日は私の人生においても忘れることのできない1日となった。



その日は、いつもと変わらない年度末の1日で、卒業式の打ち合わせが午後1時からあり、本館大講堂に教職員が集合していた。会が終わり、それぞれの仕事に戻り、私は研究室でパソコンに向かい文書作成に集中していた。

午後2時46分、突然ぐらっと揺れを感じ、その後、大きな揺れが長く続いた。数分後、揺れは一旦収まり、グラウンドに出た。グラウンドには学生、園児、教職員が集まってきていた。揺れは断続的に続き、先ほどまで打ち合わせをしていた本館は中央階段が落ち、そこに向かって潰れていた。本館から逃げてくる教職員の様子はいまだに忘れることができない。どの人も表情がこわばり、目には涙がにじんでいた。一瞬どう声をかけていいかわからなかったけれど、「怖かったね」と声をかけ合い無事を確認した。揺れは収まることなく断続的に続いた。グラウンドの中央に集まってしゃがみこんでいたが、地面が揺れる感覚がこんなに気持ち悪いものとは思わなかった。その間も本館の窓枠が押しつぶされ、ガラスがバリバリと割れていく音を聞きながら、倒壊していく様子を眺めていた。映画のワンシーン見るようだった。時間も経ち、気温が下がり、ぽつ、ぽつと雨が降ってきた。やがて、雨は雪になっていった。大きな青いビニールシートを皆で被っていたが、寒さは強まり体育館へと移動した。けれど、気温はどんどん低下し寒かった。とにかく情報を得よう、家族と連絡を取ろうと皆がしていた。体育館に置かれたラジオは地震の様子を伝えていたが、全体像はわからなかった。甚大な被害があったことはわかったが、どんな内容をラジオが伝えていたか全然覚えていない。

夜になってやっと、家にもどると家の中はひどい状態だった。食器棚が倒れ、食器は割れ、本は本箱から飛び出し、家具はずれ、重いテレビなどは床に

転がっていた。家に誰もいなくて幸いだと思った。その後の生活に日常性が戻るには時間がかかった。しばらく、玄関に近い部屋で、洋服のまま寝起きしていた。音のない部屋は落ち着かず、テレビはつけっぱなしでボーっと過ごす日々だった。原子力発電所の水素爆発の映像を見ながら、これは現実かなと思った。水道やガスの使えない生活も経験した。

しかし、ありがたかったのは、大学に出勤できたことだった。徒歩や自転車で時間をかけての出勤だったが、誰かと話ができる場所があることが救いだった。皆で片づけ作業をし、ご飯を食べることが嬉しかった。職場では元気であることができた。8月1日に行われた大学の「復興記念祭」で学長の「…そろそろ、私たちが季節を感じてもいいのではないのでしょうか」の言葉に、いろいろあったけど日常に戻って、季節を味わう余裕を持つようになっていいんだと思った。



礼拝で、この体験を話すことにはいろいろな感情が伴い、抵抗がないわけではありませんでした。しかし、東日本大震災後、福島に向けて毎週祈りを捧げ、福島の地に向けてボランティア活動をしてくださっていた名古屋柳城短期大学の皆様のことを着任後知り、話をさせていただくことにしました。ありがとうございました。

(芝田 郁子)

「東日本大震災 復興ボランティアに参加して」

東日本大震災ボランティアに参加して4回目の夏を迎えました。日本中を激震した3.11。

早いもので5年の月日が経過しています。毎年訪れる福島県や宮城県、今年は風景の様変わりを現地で感じました。今まで、遅々として進まない復興の様子や土地開発でしたが、今年の夏は町の様子が変わり、震災の爪痕がほとんど見当たらない風景を感じました。

「がん小屋」でのミーティング

大地震により発生した原発事故、建屋の爆発と放射線の流出や汚染、町全体の住民が一斉非難と仮説住宅での生活。あれから5年が経過していますが、今も放射線量の測定をし、安全確認を毎日行い基準値で生活できることを確認しながら、保育や社会生活が成り立っているという現状、そのために、他府県へ移住した人たちもいるというお話でした。

雨の中の被災地巡礼

東北の福島に着いた初日、小雨交じりの天候の中、被災地を巡礼しました。

毎年うかがう「旧ふじ幼稚園」では、施設が震災当時のまま保存され、津波の威力の跡もそのまま残されています。園舎の入り口には亡くなった子どもたちの祭壇が設置され、今年も多くの参拝者とお供え物が飾られていました。ここであった大きな悲しみに皆さんの心が集っている様子を垣間見ることができました。校庭の隅の花壇に飾られた12体の小さなお地蔵様と12個の風車を見て、亡くなった子どもや先生を偲びながら手を合わせ涙する学生もいました。

旅館での準備

明日から始まる日程のために、学生は各担当に分かれ夜中まで準備を行いました。

そんな中、大型台風の接近が予想され、日程の変更を余儀なくされる事態が発生しました。

学生たちは、このボランティアのために多くの時間を費やし企画や準備をしてきました。この夜も翌朝も、何度も話し合いましたが、最終的には2日目で切り上げるという判断に至りました。

ふじ幼稚園での交流と発表会

『ぐりとぐら』の絵本をミュージカル風アレンジして上演、短時間の物語でしたがステージ発表が始まると、子どもたちのかわいい声援「ぐりとぐらだー」が何度も飛び交いました。

園児からのプレゼントは、全園児による手話を使った園歌を歌ってくれました。そのかわいらしさと一生懸命さに感動して涙を流す学生もいました。

お年寄りとの茶話会

ふじ幼稚園を早々に失礼して、茶話会の会場に移動し、事前に送っていたパウンドケーキとコーヒーで茶話会を始めました。いつもお手伝いをしてくださる智子ママと和子ママも一緒に食べながら、学生が用意した歌を唄ったり、ハンド・マッサージしたりして交流を深めました。

ここ数年、この茶話会では高齢者の方といろいろなお話を楽しくさせていただきましたが、今回ハンド・マッサージを行うことで、今まで一度も聞く事なかった震災時の体験を参加者のみなさんが、学生に話し始めたのです。手を握り、マッサージをしながら体の緊張を解していくと、今まで話すことができなかった心の深い部分を解放して、感情を込めた話に聞いている方もその情景が浮かぶようで、おばあちゃんと学生が手を取り合って互いに涙をぬぐう姿が印象的でした。

学童の子どもたちとの交流

今回のプログラムでは、学童の子どもたちとの交流も企画・準備していました。しかし、1日繰り上げたため、実施できず持ってきたものや、学生が手作りした玩具、ケーキなどをセンターの方に預けて帰ることになりました。企画した学生のグループは大変残念な思いをしていましたが、後日、その玩具で遊んでいる子どもたちの笑顔あふれる写真やお礼の手紙が届きました。

ボランティアに参加することで、自分自身が大きなかけがえのない温かい贈り物を被災地の方々から頂いていることを実感します。

(山脇 眞弓)

6月1日・15日

「フローアンサンブル 音楽会」 フローアンサンブル

同窓会との共催企画として「フローアンサンブル」の皆さんに来ていただき音楽会が行われました。6月1日の音楽会では「音楽の時間～音楽・歴史の旅～」と題して、中世から現代にいたる音楽の歴史について演奏と解説を行っていただきました。聖歌を起源とする音階の由来や日本の音階などについて代表的な曲を演奏しながら楽しく教えていただいたり、演奏に合わせてソプラノ、テノールの歌手の方の迫力のある歌唱を聴いたりすることができました。また、多くの学生が初めて体験したテルミンと同様の電子楽器である「オンド・マルトノ」の特徴的な演奏方法や音色の響きに耳を澄ませています。

6月15日の音楽会では、「オンド・マルトノ」に加えテルミンも加わり、様々な楽曲を演奏していただいただけでなく、テルミンの演奏方法について簡単なレクチャーを受け、学生や教職員が実際に演奏するという大変貴重な機会を提供していただきました。テルミンの発する電波をイメージして、左右の手で音階と音量を調節するという演奏方法を体験した皆さんは苦労しながらも楽しんでいました。音楽会の後半では、俳優の末吉康治さんに「ごんぎつね」の朗読をしていただきました。メリハリのある声で演じられる朗読劇に圧倒され、演じ方ひとつで表現の幅が広がり、まったく違うものになることに改めて気づかされました。

(高瀬 慎二)



6月8日

「AJU 自立の家 講演会」

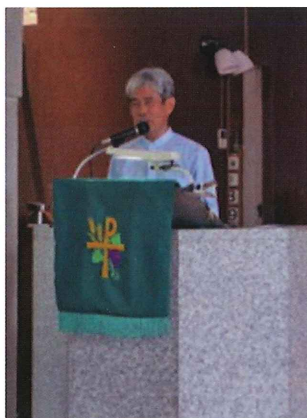


昨年度に引き続き、本学の近くにある社会福祉法人「AJU 自立の家」から職員、利用者の方をお招きしお話を伺いました。講演の初めはAJUが行っている様々な活動についてのご紹介がありました。AJUでは、「楽しくなければ福祉じゃない!」を合言葉に、障がい者自身が自己選択と自己決定できるための支援活動を25年以上にわたり続けておられます。自らも車イスで生活をしている職員の方のお話では、名古屋市内を移動する際には、ある程度バリアフリー化が進んでおり、差し障りなく家と職場の行き来ができ、生活ができることをお話してくださいました。そのため、障がいは障がいを持った人に責任があるということではなく、障がいを持った人に対して寛容ではない社会が障がい者を作り出していることを伝えてくださいました。また、学生と同年代で難病と闘いながら車イスで生活する利用者からは、ただ、他の同年代の人たちと同じように自立し、生活ができるように、当たり前前を当たり前にしたという強い思いを感じました。AJUでは「自分ひとりでやれなくても、自分の意思で介助者に頼んでやれたら、それは自分がやったこと」という考え方で運営されており、そのためにも、多くのボランティアが必要とされています。

(高瀬 慎二)

9月14日

「メリット第4代学長 逝去10周年記念礼拝」



第4代学長のリチャード・アレン・メリット先生の逝去10周年を記念して、先生の働きについて本学監事の日野忠市さんにお話をいただきました。メリット先生は1915年にアメリカで4人兄弟の末っ子として生まれました

た。日本のキリスト教主義教育の発展に寄与しておられ、1962年には、立教大学の「キリスト教教育研究所(JICE)」の発足に尽力し、73年には、南山短期大学の人間関係学科初代学科長にも就任されています。メリット先生は真面目一辺倒ではなく、大変ユニークな性格の持ち主でもあり、そのエピソードの一部をご紹介します。

人にプレゼントすることが大好きで、ある時、クリスマス協奏曲などが入ったCDを私にくれたのですが、それが実は、2年前に私が彼にあげたものだったのです。返答に困った私は仕方なしに「これが欲しかったんですよ!」と彼に礼を言うと、彼は「そうだろう!」と嬉しそうにしていました。また、自炊生活の中で、野菜や果物の残り物を集めては、チャツネと言うかジャムと言うか、調味料を混ぜ合わせて作っていました。それをまた嬉しそうに人にあげるのですが、私がもらった時には、とても発酵し過ぎて食べられたものではありませんでした。健康志向の彼は胚芽入りのパンにこだわっていたのですが、なぜか、鰻井とひつまぶしだけには目がなくて、これだけは人にプレゼントしたくなかったようです。私と一緒に食べた時に「絶対に人にあげない」とか言って食べていました。

メリット先生は、本学の建学の精神でもあるBy Love Serve(愛をもって仕えなさい)を体現した一生を送られた方でもあり、そうした先生の理念を引き継いでいきたいと思います。

(高瀬 慎二)

9月21日

「今、柳城生に伝えたいこと」

日本聖公会大阪教区主教サムエル 大西 修氏



日本聖公会大阪教区の前主教である大西修氏は、大阪教区主教となる前は、長らく中部教区の聖職として働いていました。柳城との関係は非常に深く、それは次の言葉からもわかります。「子どもの頃から柳城とは深い縁があることもあって、私はこの柳城が大好きです。……今の役目が与えられる前は、聖マタイ教会の司祭をしていましたので、柳城短大のことは良く知っています。私の兄弟姉妹の中にも柳城の卒園生や卒業生がいますし、昔は、父親が柳城のチャプレン、祖父が柳城の理事長をしていました。妻は柳城を卒業して幼稚園で勤めましたし、初恋の人も柳城の実習生で名前は今でも覚えています」と。

柳城の歴史を支えてこられた先生方の名前もたくさん登場しました。ホーキンス先生、坂東先生、高橋先生などなど。当時の先生方は、本当に学生のために骨身を惜しまずに働かれ、学生にも厳しい存在でしたが、それは愛を伴った厳しさでありました。柳城は、短大の校歌では「幼き者は、神の愛子(まなご)」と歌われ、また、附属園の園歌では「イエス様の愛に育った私達」と歌われています。このような愛が、みなさん一人ひとりのうちに注ぎ込まれています。愛に育まれた柳城の在學生であることを自覚し、誇りを持ちながら歩んでいただきたい、そして、柳城をこれまで支えてくださった人々への感謝を忘れないでいただきたい、そのような愛に満ちた元気づけられるお話でした。

(菊地 伸二)

10月12日

「AHI講演会 最果ての島で健康を守る」 —フィリピン・スルー諸島での取り組み—



AHI（アジア保健研修所）と本学キリスト教センターとの共同企画という形で開催されました。2回目となる今回は、フィリピンでは少数派であるムスリム（イスラム教徒）の女性であるエメリン・バヒン・ジャラル（以下エミー）さんをお招きし、合同礼拝では、AHIの中島隆宏さんにメッセージを、続く報告会では、エミーさんに上記の題でお話をいただきました。

エミーさんは、フィリピンの最南端にあるスルー諸島の離島であるパゴタランで病院長兼保健局長を務める中で、とくに、力を入れて取り組んでこられたことを話してくださいました。

たとえば、妊娠のことも、母親だけでなく父親にも理解を求めて家族の問題として捉えてもらうこと、保健に関わる諸問題も、ひとつの家族だけでなく地域全体のものとするために、その地域の長やキャプテンに働きかけること、また、次世代を担う子どもたちに早期から保健に関わる知識を伝えていくこと等々、その活動は実に広範にわたるものでした。社会を変えるためには、一人ひとりが変わっていくことが大切だからです。このような弛まない活動を続けてこられたのは、貧しい人びとの喜びにまさるものはないから、とも語るエミーさん。

キリスト教の礼拝を守るわたしたちには、ひとに任せ、神に仕えることを神様は喜んでくださる、とあたたかく語ってくださいました。

（菊地 伸二）

11月1日

「創立118周年 記念行事」



2016年11月1日（火）には、柳城学院の創立118周年記念礼拝が行われました。第1部では、田中誠チャプレンの下、創立記念礼拝が執り行われました。渋澤一郎理事長、長縄年延学長の式辞の後、野々垣文成特任教授（勤続41年）、三好丘聖マARGレット幼稚園主任の林知子教諭（勤続20年）、関俣子理事（勤続10年）、村田康常教授（勤続10年）、長谷中崇志准教授（勤続10年）、佐藤章裕法人係長（勤続10年）の永年勤続者表彰が行われました。

第2部では「遊べる音楽」と題して、一宮聖光幼稚園の園長、本学の評議員でもありオーボエ奏者でもある諸岡研史先生を中心に、石田正さん（オーボエ）、小室真美さん（イングリッシュ・ホルン）、野村和代さん（ファゴット）の皆さんで音楽会が行われました。音楽会の中では、楽曲の演奏だけでなく、学生が音楽の小節の書かれたサイコロを振り作曲を行ったり、バロックダンスの名手でもある石田さんの手ほどきの下、実際にステップを踏んで踊ったりするなど、題名の通り音楽で遊ぶことができ、楽しい時間を持つことができました。

同日の午後からは、名古屋市の八事霊園にある日本聖公会中部教区の共同墓地に向かい、ヤング先生をはじめとする柳城学院の関係者に献花し、お祈りをお捧げしました。

（高瀬 慎二）

新任教員からのメッセージ

巻頭言を書いていた長縄年延学長を除く、新しく柳城の教員となった先生方からメッセージをいただきました。

「学生とのかかわりから思うこと」

芝田 郁子准教授



4月から本学介護福祉専攻の教育に携わり、7か月が過ぎようとしています。担当科目は医療系の科目である「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」が中心ですが、介護系の科目や実習にも関わらせていただいています。学生が、「介護が面白い、楽しい」と言い、利用者とともに自己実現していくことを願い、日々過ごしています。現在は11名の学生が介護福祉専攻に在籍していますが、その一人ひとりが、それぞれに感性豊かで、個性も違い、将来が楽しみになります。また、その個性に関わることで本当に豊かな日々を送っているなと実感しているところです。

超高齢社会の日本にあって、今後、介護福祉士の働き方や場所は多岐にわたると考えます。保育科での学びの上に、介護福祉専攻で基本的な介護の力をつけ、多方面で活躍できる学生を育てようと思っていますので、今後ともよろしく願います。

「歌い合わせる喜びを」

内山 尚美准教授



この春に名古屋柳城短期大学へ着任してから、あっという間に半年以上が経ちました。

私の音楽への入口はピアノからでしたが、大学在学中に合唱と出会い、それから合唱のとりこになりました。

昔、音楽は生きていくための情報伝達の手段として生まれ、そして祈りを捧げるために発展してきました。その後いつの時代、どんなジャンルにおいても、人の思いから曲が生まれています。

皆さんとの音楽や表現の授業を通して、改めて感じたことが幾つかあります。一つ目は、音楽は内面のメッセージを伝えるための手段であるということ。二つ目は、「自」らの「心」を合わせることが、「息」を合わせることであるということ。三つ目は、人の声の温かさ。

歌い合わせる仲間がいること、その場所があること、そして歌い合わせる喜びに感謝して、これからも合唱を楽しみたいと思います。よろしく願います。

「キリスト教との出会い

聖公会との出会い」

勝間田 明子講師



私とキリスト教との出会いは10歳のとき、伯母の葬儀に参列したときのことです。その別れは辛いものでしたが、たくさんの白い花と美しい讃美歌「主よ みもとに近づかん」に、死は寂しいけれど悲しむべきものではないことを感じました。そのときから、キリスト者として死ぬ(=生きる)ということについて考え始め、紆余曲折を経て基督教系の大学に進学し、20歳のクリスマスに受洗しました。

名古屋柳城短期大学での奉職の道が拓かれたのは昨年度

ですが、大学院生時代に名古屋学生青年センターでアルバイトとして色々なお仕事をさせて頂いたこと、祖父の弟(岩田耕平)が聖ルカセンターの開拓に関わっていたこと等、聖公会の活動を近くに感じながら今日まで導かれてきたことを思い、感動を覚えています。

つねに大きな力に守られ、背中を押されて、ようやく歩んでくることができた弱い私ですが、平和を創る柳城学院の教育の営みに加えられたことに感謝し、自分のすべきことを祈りの中で求め続け、力を尽くします。

「皆さんとともに」

菊池 理恵助教



こんにちは、今年度より名古屋柳城短期大学にお世話になっております。昨年度までは非常勤講師として学校に来ておりましたが、皆さんとの関わる時間は、担当する教科だけでした。しかし、今は皆さんと向き合える時間をもたせていただけるようになり、日々の授業の中などで成長させてもらっています。ある日、授業で、「先生、私、この課題できない、どうしよう?」という問いに、「まずやってみて、やってみないことにはできるかどうかかわからないよね。はじめから諦めないで・・・。」と答えながら、まるで自分に対して言い聞かせていると感じました。皆さんからの関わりで気づくことがたくさんあり感謝しています。私は、まだまだ未熟な点も多く、皆さんとともに勉強していきます。どうぞよろしくいたします。

「置かれた場所で咲きなさい」

扶瀬 絵梨奈助教



こんにちは。本年度より名古屋柳城短期大学でお世話になっております。

柳城への着任が決まった直後、遠くに住む家族からタイトルの本を貰いました。長縄学長や田中チャブレンから捧げられたメッセージの中にもありましたので、心に残っている方も沢山いらっしゃると思います。毎週水曜日の礼拝は私にとって、一週間の自分を客観的に思い返す時間です。私の専門は音楽(ピアノ)ですが、そんな振り返りを続けるうち、あることに気がつきました。それは、自分は花が咲くということのほか、それまでの過程にも種を見つけ、一生懸命になれる職能に置かれているということです。置かれた場所で咲きなさい——この詩には、続きがあります。“咲くということは、置かれたところは仕方がないとあきらめることではありません。それは自分が笑顔で幸せに生き、周囲の人々も幸せにすることによって、神があなたをここへお植えになったのは間違いではなかったと、証明することなのです。”

与えられた場があることに感謝しながら、この場所で努力を重ねて参ります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

「世界一の人気者」 サンタクロース



今から120年も前のお話、ニューヨークに住む8歳の女の子が「ザ・サン」という新聞社に手紙を書きました。それは、こんな手紙です。

「記者様、わたしは8歳です。私の友だちに“サンタクロースなんていない”と言っている子がいます。パパに聞いてみたら、“サン新聞に問い合わせませんか？新聞社で、サンタクロースがいるというなら、そりゃもう、たしかにいるんだろうよ”と言いました。ですから、お願いします。教えてください。サンタクロースって、本当にいるんでしょうか？～バージニア・オハンロン～」

バージニアちゃんのこの質問は、多くの子どもたちがいつか直面する問題かもしれません。バージニアちゃんのパパは、とても上手くその場を切り抜けたね。

でも、この小さな子どもの質問にサン新聞は実に誠実に応えました。編集長は、フランシス・P・チャーチという記者にこの質問に答えてみないかと言いました。チャーチさんは、1週間、悩みに悩み、後に世界一読まれた社説と言われた文を残しました。毎年、クリスマスの時期になるとこの社説はあちこちの新聞に掲載されるほど有名な社説になったのです。

…サンタクロースがいるというのは、けっしてうそではありません。この世の中に、愛や人へのおもいやりやまごころがあるのと同じように、サンタクロースはたしかにいるのです。(中略) サンタクロースがいなければ、人生の苦しみをやわらげてくれる子どもらしい信頼も、詩も、ロマンスもなくなってしまうでしょう、私たち人間のあじわうよろこびは、ただ目に見えるもの、手でさわるもの、感じるものだけになってしまうでしょう。また、子ども時代に世界に満ち溢れている光も消えてしまうでしょう

この世で大切なことは、眼で見えるものだけではない愛や信頼ですとチャーチさんは強調します。

今度は、もっと古い時代のお話です。紀元後300年頃、ニコラウスという若い司教が誕生しました。このニコラウスこそ、サンタクロースのモデルなのです。(聖ニコラウス→セント・ニコラウス→サンタクロース)ニコラウスの名を掲げた教会や施設は世界で数えることができないほどです。ニコラウスには実に多くの逸話や伝説があります。その中でも有名な逸話は、落ちぶれた貴族に3人の娘がいて、結婚をさせることもできず、逆に身売りさせることを考えていた話を聞き、隣人のために夜、こっそりお金を投げ入れ娘たちを助けた、難破した船でニコラウスの名で祈ると船と水夫が救われた、子どもを生き返らせた、飢饉の時町を救ったなど。隠れたところでこっそりと人々を救っていたニコラウスの行為は、いつしか知られることになり、多くの人々の尊敬を集め、今日に至っているのです。

あのバージニアちゃんは、チャーチ記者の言葉を一生、胸に留め、学校の先生になりました。貧しい子どもたちの地域やユダヤ人の学校などに勤め、子どもたちに夢や希望を語り続けました。そして、アメリカ中から呼ばれ、講演をしたり、子どもからの手紙に一つひとつ応えることを続けました。

子どもの素直な質問に心から応えたチャーチさん、その言葉のように生きたバージニアちゃん、そしてサンタクロースのモデルになった聖ニコラウスの愛の行為は、イエス様の誕生がなければありえません。

※『サンタクロースっているんでしょうか?』

(偕成社、中村妙子訳、1977年)

※『サンタの友だち バージニア』

(偕成社、村上由美子著、1999年)

※『サンタクロースって、だあれ?』

(教文館、ロビン・クリントン著、1988年)

(本学名誉教授 尾上 明子)

2016年12月21日発行 第29号
発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼 発行所 キリスト教センター
印刷所 日興商会